

(様式第4号)

上田市美術館協議会 会議概要

1 審議会名	上田市美術館協議会
2 日時	令和2年12月16日 午前9時30分から午前12時まで
3 会場	上田市立美術館子どもアトリエ
4 出席者	小林幸雄会長、佐藤聡史委員、武田敦子委員、土屋健治委員、伴美佐子委員、山崎優委員、米津福一委員（五十音順）
5 市側出席者	西田館長、荻原総合プロデューサー、柳原政策企画部長、清水館長、山寄館長補佐、小笠原館長補佐、岡田主査、松井主査、清水主任、青木主任、山極主事、吉川美術教育指導員
6 公開・非公開	<u>公開</u> ・ 一部公開 ・ 非公開
7 傍聴者	1人 記者 0人
8 会議概要作成年月日	令和2年12月18日

協 議 事 項 等

1 開会(会長)

2 協議事項

- ・資料に沿って事務局から概要を説明

(1) 展覧会連携事業について

(委員) 展覧会連携事業は展覧会事業の中の基本的な部分である。具体的な課題を知りたい。

(事務局) 講演会やパネルディスカッションを開催する中で、講師や有識者の話が尽きず予定時間を超えることがあり、吉田博展の講演会では、1時間半の予定のところ更に1時間ほど延びた。こういうケースがあるので、講師との事前打合せを行い、時間内に納まるよう進行するなど、臨機応変な対応が必要である。

(委員) 予定時間を超える場合は、一旦講演会を終わりにし、より交流したい方のためにその場で新たな時間を設けることで講師との交流が深まると思う。

(委員) 吉田博展における登山&山岳スケッチワークショップでは、講師の方と一緒に烏帽子岳を登山しながらスケッチをした。こういう方法は、上田市立美術館ならではである。

(事務局) 吉田博展では、他館に真似できないワークショップをやりたいと考えていた。かつて吉田博が丸山晚霞と一緒に北アルプスを登山したり、吉田博が烏帽子岳を描いたことをヒントに企画し、当館としての付加価値を付けた。ワークショップは1人でも来てもらえれば開催しようと考えていたが、実際は10人集まった。

(委員) 同時期に横浜美術館では、コレクション展「自然を映す」を開催しており、丸山晚霞の水彩画についてギャラリートークを行った。丸山晚霞の絵画(夏の山岳風景)と関連がある吉田博の絵画について調べていたところ、登山のワークショップについて知ったが、こういう企画は地元ならではであり、良いワークショップだと思う。

(委員) 丸山晚霞記念館では、ギャラリートークを行うときの工夫として、適宜学芸員がクイズを出題し、会場の空気を和ませている。

(2) おとなのアトリエ事業について

(委員) 2年前に「おとなのアトリエ講座」でリトグラフを体験した。その経験は、今の制作活動に活

かせている。

(委員) 丸山晚霞記念館ではできない事業であり、とても良い事業だと思う。創作活動の内容は、版画を中心に発展していけばいいのではないかと。各回完結の講座は、受講者が自ら継続的に学習することが難しく、どの美術館でも同じ問題を抱えている。府中市美術館では、美術史の連続講座を開講しており、他館の学芸員が講師を務めている講座もあるので参考にしてみようか。

(委員) 高校生・大学生及び若い社会人の参加が少ないという点について、横浜美術館でも同じ課題を抱えている。学生向けに講座を企画することが難しく、中高生は、受験やクラブ活動があるので美術館に足が向かない。しかし、展覧会に関連したワークショップや講座は、美術館として特色を出せる良い機会である。市民からカルチャーセンターとの違いについて問われることがあるが、美術館での講座は、コレクション作品を生かし受講者の鑑賞意欲や制作意欲を高めるものだと考えている。

(委員) 子どもアトリエが人員不足である現状を踏まえると、おとなのアトリエの受講者に子どもアトリエのサポーターになってもらうのはどうか。

(委員) 子どもアトリエの内容や目的を理解したうえでサポーターになる仕組みは、インターシップと同じ考え方であり、人材育成に繋がる。

(事務局) サントミュージゼを利用する若者は、自己表現する場、感性を磨く場として当施設を利用している。1週間演劇の制作に取り組んだり、休日は中高生が芝生広場でダンスをしている。学生には、学業だけでなく、上田地域の特性を生かして成長してもらいたい。若者の自己表現の場としてサントミュージゼ全体で事業を企画していきたい。

(委員) 例えば、横浜美術館の最果タヒ「詩の展示」の展覧会では、インターネットで話題となり、20～30代の方が多く来館した。来館者が通常2,000人程度のところ、この展覧会は6,000人から7,000人が来館した。最果タヒ氏とのギャラリートークは、本人はメディアに露出しないため登壇せず、代理人の方で行った。このギャラリートークでは、若者が多く来ており、美術に興味がない方も詩に惹かれて来館するなど内容によって人は集まることがわかった。現代美術の分野は絵画や彫刻だけでなく、文学や映像など多岐にわたってきていると感じている。

(3) 子どもアトリエ事業について

(委員) 教育現場から見ると、この事業は、子どもたちが豊かな経験を積むことができ、より多くの子どもたちに活動の場を提供している。公立保育園・幼稚園のプログラムについて、送迎サービスが付いていることも良いことだと思う。学校教育の質の向上のため、事業の周知と活用方法を学校と協力して考えていかなければならない。上小美術教育研究会では、子どもアトリエで実技講習会や対話型鑑賞研修を行っており、継続的に行っていきたい。自分のクラスでは、「ぬりえすごろく」の山本鼎の版画「ブルトンヌ」を活用して対話型鑑賞を行った。美術館を利用した学習方法の活用方法を提案してほしい。

(委員) 学校との連携については同意見である。市立保育園・幼稚園にバスを手配したことは良いことである。美術に関心がある先生とそうではない先生がいることによって子どもたちの経験に差が生じる場合がある。教員にも世代交代があるので、先生に向けての情報発信を継続していくことが大切である。

(委員) 市内の小中学校への周知方法を考えたほうが良い。招待券を市内全域に配布すると反応が違う。丸山晚霞の展覧会のチラシを配布しても反応が薄いので、猫まみれ展のような子どもが興味を持

つ企画展には反応がある。東御市では、教員は無料で観覧できる仕組みになっている。

(委員) 必要に応じて美術館から校長会・教頭会で周知することを検討してもいいのではないか。

(委員) 横浜美術館では、企画展ごとに土曜日の午前中にアートティーチャーズデイを開催しており、学芸員が裏話を挟みつつ説明していたことに特別感があった。先生が生徒にその面白さを直接伝えられれば、生徒が興味を持ってくれると思い行っていた。当館では、担当が変わったことにより引き継がれなかったのが、継続していけるようにしたい。

(委員) 子どものころ、自由画運動が盛んで、先生と展覧会や写生に行ったり、山本鼎や石井鶴三のことを伝え聞き、「感じたものが尊い」という精神を教えてくれた。その経験が今の活動に生きている。

(委員) 上小美術教育研究会の活動を子どもアトリエで行い、事業内容の周知や展覧会の観覧など既存の資源を活用することで、教員と美術館が繋がるのではないか。

(委員) 上小美術教育研究会は21人が所属している。事務局主導で活動しており、各先生が多忙で集まるのが難しい。

(委員) 美術専門教員以外へ普及するための方法を考えなければならない。研究会は管轄エリアが広範囲であるため、年1~2回集まる程度である。上小児童生徒立体等作品展や上小児童生徒版画展を開催していることで、美術館に子どもやその家族が来館するようになった。

(4) 連携事業について

(委員) 交流文化芸術センターでダンスや音楽の公演をされた方が、美術館で講師としてワークショップを行うのも1つの方法である。

(事務局) 展覧会では、ピアノ演奏やダンスとのコラボレーションイベントを開催したり、子どもアトリエでは、日本劇作家大会とコラボレーションして子ども向けの影絵のプログラムを実施した。

(委員) 横浜美術館では、展覧会に関連した作家に子どもアトリエの講師として講座をやってもらった。子どもたちが自身の思いを言葉や体で表現できる状態へどのようにアプローチできるかを常に考えており、パーカッションやダンス等他ジャンルの方に講師をお願いしたこともある。また、アーティストの手形アートと子どもたちへのメッセージを収集し、展示していた。文化施設は、現存のアーティストと出会う場であるので、未来の人たちに繋げていけるような方法があると良い。

(委員) 市として規模拡大または縮小を考えている教育普及事業はあるのか。

(事務局) サントミュージゼは育成事業を基本理念に据えており、学びの場を提供したいと考えている。各事業の比重割合は、子どもアトリエが一番大きく、次に展覧会連携事業やおとなのアトリエ事業となる。高齢化社会において、健康と社会参加がキーワードとなっているので、大人の方には講座に参加していただき、仲間を増やしてもらいたい。予算には制限があるため、事業を取捨選択していきたい。

(事務局) 当初の運営管理計画に基づき、育成事業を主に進めてきた。この協議会でご意見をいただき、計画の見直しをしていきたい。

(5) その他

(委員) 教員が授業で活用できるようにコンテンツを制作してもらえたら良いと思う。学芸員は専門性が求められており、一般事務職員と同様に異動があれば人材の流出に繋がりにくいと考え

した方が良い。子どもアトリエで中心的に活動している職員に対する処遇に、あきらかに格差がある。美術館の大きな柱としている事業にかかわらず、内部でこのような状況が存在していることは、言動不一致と言わざるを得ない。正規職員、会計年度任用の身分のことをいうのではなく、専門職としての地位の確定と能力と業績に基づいた報酬等の公平性を求める。

年間事業費については、コロナ下における経済状況を鑑みれば今後数年間の財政の厳しさは現実的なものとして受け止めなければならない。青天井では困るという当局の考えも理解できる。そこで事業費を定額にしてはどうか。予算内に収めるために補助金の活用や事業規模の見直しをすることとなり、余った予算は人件費に流用しても良いのではないか。

(委員) 子どもアトリエ事業は、幅広い年齢層に認知されている。更に充実した内容の講座を提供できると良いのではないか。

(委員) 横浜美術館は、公益社団法人横浜市芸術振興財団が指定管理者として運営しており、横浜市からの指定管理料が7億6千万円（うち人件費が3億6千万円）、年によるが、総支出は11億円台であるので、差額の3億4千万円は自主事業収入等で賄う必要がある。教育普及事業であっても大人のアトリエは受益者負担の観点から受講料をいただいております、子どものアトリエは徐々に値上げせざるを得ない。企業協賛の事業もあるが、職員の負担が大きく、常に人員及び時間不足である。上田市立美術館の子どもアトリエアンケートの中の「回を重ねるごとに子どもの創作能力が高まった」という感想を拝見すると、親御さんからも支持されていることが伺える。こういう部分は、数値化が難しいが、長期的に考えると美術の良き鑑賞者となるため、子どもや若い人向けの事業に予算を割いていただきたい。こういう事業を通して個人のクリエイティブな部分が育ち、行動的な人が増えることで街の活性化に繋がると思うので、未来への投資という観点も大切だと感じる。

(事務局) 当館の人事異動は市の方針に影響されるが、美術館としての質の維持向上を考えなければならないため、専門職員の採用方法を検討していきたい。

3 閉会(会長)